



こ  
の  
子  
供  
た  
ち  
(16)

イーデイス・ウオートン作  
松原至大譯

二人の女性

「それは、男の方が、だれでもお婆へになることです」と、ジュデイスは言った。身体を後にひいて、半ばまぶたをつむると、また口を開いた。「恋をするということは、ふしぎなことね。ブランカは、いつも私より鋭いので、『どこか静かなところで、お友だちとでも会うのでなければ、マーティンさんが、あんなに急いでヴェニスを出発する訳がない』って、言っておりました。こうしてあなたのおじやまをするなんて、私、すいぶん馬鹿でした。あなたは、どうしたら、私たちを追いはらうことができて、父と母の争いに、かかわりのないようになりするのか、考えていらっしやるのよ。」

マーティン・ポインは、半ば腹立たしく、半ば急所をつかれるような思いがした。つとそばによって、しっか

りとジュデイスの手の上に、自分の手を重ねた。

「ま、待って下さい。つまらぬことを言うものじゃない。ぼくが考えていることは、どうしたら、君たちが満足するようにできるかということだけです。今のように、君たちがいっしょにおられて、しかもぼくが、君の両親に、よけいなおせっかいをしたのだと思わせたくない。君たちは、全く正しい。それだからこそ、ぼくはおとうさんと、平和になりたくないんですよ。いつか折があったら、おとうさんたちには、君たち子供を、離れ離れにする権利はないということを、話してあげたいのです。それがかなえば、君たちのためには、なによりです。だが、どうしたら、そうなるか。まだぼくには見当がつかない。それで、君をセラーズ君に紹介したいのです。」

予期に反して、ジュデイスはじっと聞いていた。ボインの言葉が終ると、すなおな子供らしい顔をあげた。

「私、あなたのおっしやるとおりに致します。でも、ランチがすんでから、ナニーにチップを連れてきてもらえば、あなたのお友たちに、一層よくわかつて頂けるのじゃないかしら。」

「なるほど。それはよい。」ボインは、心からうなずいた。そこでジュデイスは、二階へ行って、テリーに会ってくれるように、ボインに頼んだ。

テリーに会うことは、だれにとっても、その人の身も心も、ホキータ家の小さな人々の味方にしてしまふ、最も確かな方法であると、ボインも思わざるを得なかった。セラーズがジュデイスに会って、どう思うか、わからないが、テリーに会って、どう思うかは、疑う余地はなかった。

その日の朝、ボインは、かなりの間、セラーズの人生観と、ジュデイスの人生に対する体験との間の、橋渡しをするためには、どれだけの好意があるかと考えてみたが、よくはわからなかった。しかしセラーズとテリーと

の間は、なんの橋渡しもしらないであろう。目と目とが会うと同時に、二人の心は触れ合うであろう。「ランチがすんだら、会わせてやろう」と、ボインは心にきめた。

だが、その日の中に、テリーが山荘へ登って行くことは、望みがなかった。テリーは、家出をした興奮と、旅の疲れと、熱とで、ただ横になったまま、じっとボインを見つめていた。ヒルティナは空気がよいから、自分の身体もよくなるというのが、精いっぱいであった。スヌープが医師をむかえて、適当な手当をしていたので、この病人も平熱に近かった。

「もし父や母が、私たちをころして、おいといてくれさえすれば、ぼくはきつと全快します。マーティンさんはここにおいて、子供たちを監督して下さいませんか」

ボインは、ホキータ家の子供たと、両親とのもつれが、うまく解決しそうになるまでは、ここを離れないと答えた。自分が両親にかけ合うことは、確かに必要であるという、テリーは、すぐ賛成して、こういった。

「だから、姉さんとぼくは、ここに來ることにきめたのです」ねえ、マーティンさん、ぼくたちを、また離れにすることは、いけませんね。ぼくもいやです。こんなことでは、ぼくたち、教育なんか受けられやしません。お行儀だって、シニアさんが来てからというものは、子供たちは、すっかりだめになってしまいました。プランカのことでは、おしやれと、おべっかばかりすることを考えていますし、父と母との間がますますとすぐ子供たちは、勝手なことばかりしています。ほんとうの争いになる前からだって、みんな手がつけられなくなっていたのですが。いつかも、ジニーが、バンの横面をなぐりました。それは、あの子が、またプリンスになつてローマの父の御殿に住むんだっていったものだから。自分の名も書けない癖に」

「なるほど。どうにかしなければならぬ。ぼくが、君たちのおとうさん。おかあさんにわかってもらいたい

と思つてゐるのは、そのことです。だが、その間に、君は充分静養しなけりやいけない。ぼくは約束しよう。時が来れば、きつと出来るだけのことをする」

「いいえ、約束なんか、いいんです」テリーは、安心して、頭をまくらにのせた。

ポインは、ジュデイスと丘を登つて行く道すがら、前の晩、疲れと興奮とで、聞くことのできなかつた。細かな話を、かの女から聞くことができた。スコープの打明け話は、いつも陰気で、概念的なものばかりであつた。細かなことになると、職業意識による秘密主義でかくされてしまつた。ポインは、それを押しつけて聞くことを好まなかつた。ところが、人生の特異なところばかりを見るせいにか、ジュデイスには、こうした遠慮のいらぬことをポインは知つていた。でも、結局、今のジュデイスの話には、格別予期しないようなものはなかつた。いつもの、古くさい夫婦喧嘩であつた。ジニア・ラクロスが、家庭教師のジェラルド・オームロッドに、妙な目付きをしはじめたので、ジョイスは、オームロッドと、いっしよにいなければ、いやだと言ひ出したこと。ジュイスとホキータが、「ファンシー・ガール」のデッキで、ぼんやりしてゐたり、またはいつものお客を集めたりしてゐるのに、オームロッドは、毎晩レンチ夫妻や、メンドイップ公たちと、リドーで晚餐を共にしてゐるのだと思ふとこの元気な婦人は、じつとしてはおられなかつたということ。そしてジョイスは、突然この家庭教師を解雇するように、夫に頼んだということだ。ホキータは、テリーがなすつてゐるから、それはできないといつた。（それはジュデイスも認めていた）するとジョイスは、ホキータと離婚して、オームロッドと結婚するといひ出した。もちろんそれを聞いてホキータは怒つたといふのである。ジュデイスの言葉をかりて言えば、その時、一座が湧きかえつた。オームロッドが、ジュデイスと結婚したいと言ひ出したからである。

「えっ、君と結婚する。みんなの気でも狂ったのですかな。」思わずポインは興奮して、こう繰り返し繰り返し言っているのに気がついた。

ジュデイスは、ほほえんだ。

「私、気はちがいがやいたしません。もう十六にもなりますもの。それに、私は相続人ですから。でも、私が、子供たちを見捨てるとお考えになりやしませんわねえ。それに、私がスペルもよく覚えないうちに、結婚するなんて、おかしいうて、テリーは言っております。」

「全くだ。ほくだって、そう思う。」ポインは、腹立たしそうに言った。こんな調子で、セラーズと話し出されたら、一体どんなことになるであらう。

「でも、私にはわかりませんの。えらい人でも、スペルのできなかった人があるって、ジェラルドさんがおっしゃっています。ナポレオンは、スペルができなかつたんですって。それからセヴィナ夫人も。シェイクスピアだって、いつも自分の名のスペルをまちがえていたのですって。」

「ほくとお別れしてから、歴史を勉強しましたな、君は。」ポインが笑いながら言うと、ジュデイスは真剣になつて、

「いいえ。いつか私が、スペルのことで泣いていましたら、あの人が教えてくれました。」

「なるほど、あなたがスペルのことで泣くのは、もっともなことです。テリー君がいうように、もっとと学問をしなければならぬ。」

「それなら、多分、ジェラルドさんと結婚するのが、私にとってよかつたのでしよう。」ジュデイスは、さっぱりとした気持ちで答えたが、「でも、いけません。私が結婚してしまえば、子供たちの世話ができません。」と打

ち消した。

「さあ、来ましたよ」ポインは、いら立って言った。

「まあ、お若い方」セラーズは身体をまげて、ジュデイスの頬にキスをした。うす手の黒いドレスを着て、その金髪が、姉でもあるかのように、ジュデイスの頭髪の上にかかっていたが、セラーズのなんと若く見えること。ポインは、まずそれを感じた。そして次ぎには、こうした挨拶で、親しみを持たされるのには、あまりにもジュデイスは幼な過ぎたということである。

ジュデイスはほほえみながら、セラーズを見た。そしてなにか含んだ単純さで聞いた。

「なにに比べて、若いとおっしゃいますの」

「まあ、あなたが荷わされていらっしやる責任に対して」思いがけない問いだったので、セラーズはとまどいした。

ジュデイスは、まだほほえんでいた。つつましやかな、ほほえみではあったが、ポインは、これはいけないと思った。

「お世辞をおっしゃって。でも、あなたや母の年配の方ですと、お若いといわれますと、お世辞になります。でも、私、まだ十六にもなりませんの。ですから、私には、当り前としか思えません」

セラーズは、

「あなたのようなお若い方が、わざわざ私のような、おばあさんのところへ会いに来て下さったのですから、ほんとうに御親切と思えます」と、古い逃げ口上を言った。

「ええ、私が伺いたいと申上げたのです。マーティンさんが、あなたが私のお友だちになって下さるとおっしゃいましたし、それに、私にはよい友だちがないのですから」ジュデイスは、ピロードのような目で、セラーズをじっと見つめた。

セラーズの目は、すぐにやわらげられた。

「マーティンさんのおっしゃった通りですよ。あなたさえ宜しければ、私、仲よしにして頂きます。おひるのお食事に来て下さって、うれしゅうございます。それからマーティンさんからお聞きになったでしょうが、家が狭いものですから、皆さんに来て頂けなくて、残念でした」

「ありがとうございます。皆では、あなたが、押しつぶされてしまおうとでも、マーティンさん、お思ひになったのでしょうか」

これに答えて、セラーズは、それは旧友の余計な心配ですよと言って笑った。

とにかくも、万事その旧友が予期したよりも、よく行きそうであった。マーティンは、ただジュデイスが、ソファの上に帽子をほおり出したり、マントルピースの上の鏡に向って、乱れた髪に指を通したりするのを、セラーズが大目に見てくれればよいがと思った。食卓につくと、セラーズは、ホキータ家の子供たちのことを話し出した。子供たちの名を、すっかり覚えてしまつて、義理の子たちをふくめて、全部に一日も早く会いたいと言つた。そして「マーティンさんが考えていらつしめるように、私は、そなたやすくは、皆さんがいらしても、押しつぶされはしません」と言い添えた。